

高次脳機能障害作業所における記録実践 - 記録への指向と共同的推論 -

水 川 喜 文

目 次

- 0. はじめに
- 1. 高次脳機能障害の記録という実践
 - 1 - 1. 記録という実践とカテゴリー
 - 1 - 2. 高次脳機能障害作業所の記録～
「本日の活動」から
- 2. 「今日の一言」の記録実践
- 3. 「記録および打ち合わせ」の記録実践
- 4. さいごに

0. はじめに

本稿では、高次脳機能障害作業所における記録という実践がいかに行われるか考察する。すなわち、この研究では当該の作業所における<記録>と<その記録を実際に書いている場面>を関連づけて分析することによって、記録という日常実践がいかに生み出されており、記録することによってその場面の参加者が共同して何を生み出しているか考えていきたい。

高次脳機能障害とは、事故や病気によって脳組織が損傷を受け、記憶・思考・感情など高次の認知機能に変調をきたす障害である。この障害は必ずしも身体的障害や失語症状が伴わないため外見や短時間のやりとりでは同定できないことがあり、「見えない障害」と

呼ばれることがある。本研究は、この高次脳機能障害を主たる対象とする作業所「コロポックル」（現「高次脳機能障害クラブハウス『コロポックル』」、札幌市）をフィールドとして行った共同研究プロジェクト「相互支援コミュニティ発達プロジェクト」をもとにしている。

さて、この「コロポックル」では、様々な記録が行われている。その中で本稿が扱うのはメンバー（作業所来所者、高次脳機能障害当事者）と指導員によって一日の作業の最後にかかれる「終わりの会」の記録と、その後には指導員を中心に行われる「記録および打ち合わせ」の記録である。これらの記録がどのような場面でどのようにして行われているか考察する。その作業所の指導員が会話しながら記録する場面において、あるメンバーの「見えない障害」と言われる高次脳機能障害（主として脳外傷）を持つ人に関していかなる共同的推論を生み出しているのか、その場面の会話データをもとに考察したい。その際にはエスノメソドロジー的な会話分析の視点により会話のシークエンス（継起）の組織化、カテゴリー使用などに注目して考察を行いたい。

このような研究を行うための順序としては次のようなものを考えている。まず作業所の記録のデータについて概略しながらフィールドについての説明を行う。そして、高次脳機能障害の記録実践とはどのようなものかにつ

キーワード：高次脳機能障害，記録実践，相互行為，カテゴリー，会話分析

いて考え、「終わりの会」で記録される「コロポックル作業所 日報」(資料1. この資料には「日誌」と印刷されているが、現場では「日報」と呼ばれているため「日報」とした。)について、実際に行われた終わりの会での発話を含んだやりとりを、相互行為のデータをもとにして会話分析によって描き出す。その中で、終わりの会という一つのミーティングの中で、記録をとるという実践がどのような意味を持っているかを考察していく。これはつまり、記録をとることと会話に参加するということが、その終わりの会をいかに組織化し、そして組織化されているかということとを解明することである。

コロポックル作業所 日誌

日付	場所	時間	参加者	記録者	内容
2011.10.21	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.22	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.23	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.24	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.25	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.26	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.27	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.28	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.29	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会
2011.10.30	作業所	10:00-11:00	指導員、役員、メンバー	指導員	終わりの会

資料1 (コロポックル日報 日課・出来事)

さらに、メンバーが参加する「終わりの会」が終了しメンバーが帰った後に、指導員(および時に役員)によって行われる「記録および打ち合わせ」に注目し、その会話とその際に記録される「個人ファイル」(注1)を分析する。この「記録および打ち合わせ」は正式な会議ではなく、インフォーマルに指導員同

士が「打ち合わせ」をしながら「個人ファイル」を記録する時間である。ここではメンバーと家族に関する情報交換が、指導員同士、あるいは役員も入って、時間をおいて何度も繰り返し行われる。その中で、指導員同士がその日見えた情報や関連する情報が何度も確認され重層化していくとともに、記録されていく。この研究ではその「記録および打ち合わせ」の場面のビデオデータをもとに、会話と記録との関連において分析することにより、記録するという行為を指向しながら様々な活動が組織されることを描写していきたい。

以上のようにこの研究では記録した結果だけではなく、記録を実際の記録する実践の場面に立ち戻って考察することにより、その記録実践が作業所という相互支援コミュニティにおいてどのような関係にあるのか考えていきたい。これは一つの記述がいかんして一つの秩序ある記述として成り立ちうるかというエスノメソドロジ的な課題から生まれてきたものである。つまり、一つの記録実践の中に高次脳機能障害の作業所における社会秩序がいかんして組織化されているかということ、一回の実践を秩序ある実践として見て言える(looking and telling)のはいかんしてかということ、そしてそこに偏在する社会秩序を理解可能にする実践をいかんして生み出しているか考察すること、これらがこの研究の課題といえる。

・「終わりの会」の構成と資料・データ

ここで「終わりの会」の構成と資料・データの説明をしておこう。

資料1、資料2の「コロポックル 日報」は「終わりの会」の最中に指導員によって記入される。「終わりの会」は一日の最後にメンバー、指導員、役員、その日の参加者が一つの部屋に集まって開かれるミーティングである(図1参照)。丸いテーブルにはメンバーと指導員1名または2名が座り、長方形のテー-

ブルには残りの指導員と役員，見学者などその他の出席者が座るとするのが基本形である。

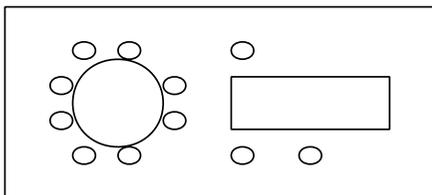


図1 「終わりの会」の配置
(○が人を表す。大きな丸と長方形は机)



資料2 (コロポックル日報 個別・特記事項)

終わりの会は、指導員の一人が司会者となり、まず連絡事項や検討事項について話し合い、次に「本日の活動」について時系列を追って全員で確認し、最後に「今日の一言」で一人ずつ今日感じたこと考えたことなど語るという順番で進行する。終わりの会の時間は午後4時頃から30分ほどが多かったがその時の参加メンバーや話し合う内容によっては60分を超えることもあった。

この終わりの会で指導員が記入するのが資料1，資料2の「コロポックル 日報」である。資料1はその1ページ目で、当日作業所に来所したメンバー，指導員その他参加者が

記入され、先の「本日の活動」の際に「時間」欄に沿って「日課・出来事」が記入される。この「本日の活動」を全員で確認するのは、高次脳機能障害の主な障害である記憶や認識の障害に関連している。そのメンバーの障害により午前中何をやったか記憶にないことや覚えていても適切に表現できないこともある。この「本日の活動」では時系列に沿って誰が「日課・出来事」に参加したか誰からでも自由に話しをすることができる。資料2はその2ページ目で「個別・特記事項」の欄がある。ここでは、「終わりの会」の「今日の一言」で言ったことが個人別に記入されることになっている。「今日の一言」は「本日の活動」のフリートーク的な雰囲気と違って一人ずつ時間が与えられ、個人の考えたことや感じたことを語る事ができる。

「終わりの会」が終わって一段落すると指導員による「記録および打ち合わせ」が始まる。これは先に述べたとおり公式なミーティングではなく、非公式に指導員同士が「打ち合わせ」をしながら「個人ファイル」に記録をする時間である。資料2のQMさんの「個人ファイル」にあるとおり氏名、日付、特記事項、記入者名の欄があり、氏名欄にはメンバー名を記入して、個人別にファイリングされている。特記事項にはそのメンバーについてその日に気づいたことを記入するようになっている。特記事項は5行程度のこともあれば20行のこともあり指導員に任されている。

ビデオデータは終わりの会を中心に十数本録画した(調査許諾関係は、相互支援コミュニティ発達プロジェクト編2003参照)。「終わりの会」では丸いテーブルの外側上方から全員がフレームに収まるように録画した。「記録および打ち合わせ」では、別室のテーブル上で指導員が記録する場面をテーブルの端から録画した。

今回の研究では、QMさんに焦点を当て、「終わりの会」でQMさんが話している場面

(断片 1 = トランスクリプト) と、その QM さんが「記録および打ち合わせ」で話題になって記録に関わっている断片 (断片 2, 断片 3, 断片 4, 断片 5) を分析する。QM さんはこの作業所に来て数週間でこの時点で新参者といえるメンバーである。QM さんに関する記録を研究対象にした理由の一つは新参者であるという点で、すでに扱いが固定化しているメンバーではなく扱いについて議論しいくつかの仮定をもって接し方を推論している場面が見られたことにもよる。

1. 高次脳機能障害の記録という実践

1-1. 記録という実践とカテゴリー

ここでまず記録とはいかなる実践であるかということについて考え、確認してみたい。本稿で考察する対象は、高次脳機能障害の作業所で行われる記録という実践である。作業所では、日々、記録が生み出されている。一つの記録は過去の出来事を「ありのままに」記録する (事実と対応関係を作る) という意味と共に、未来に特定の (カテゴリーを持った) 人に読まれることを想定して記録するという意味を持つ。さらには、ある状況下で記録を刷るという「現在」もあるわけだ。すなわち、どのような状況で誰が書いて、誰が読み何に利用するかということについて、記録するという実践は社会的カテゴリーと活動を伴ったそのコミュニティの規範と関連して一つの秩序を生み出しているといえる。すなわち、記録は社会的実践の中にある。

そこで「コロボックル作業所 日報」を例にとってどのようなカテゴリーが用いられどのような秩序を生み出しているか概略してみよう。「日報」の最初のページ (資料 1) には、「記録者」という記録責任者の欄がある。この「記録者」は記録した人であり記録の責任を持つ「筆者 (author)」としての規範的カテゴリーを持っている。「記録者」は「日報」

を書くという作業をするのであり、「日報」の全ての記録は、記録した「筆者」という主体と関連づけられることになる。その「記録者」の欄の下には、その日に作業所に来た人を「メンバー」「指導員」(作業所、外勤・出張別)、「家族」「ボランティア」「来客」というように社会的カテゴリーに分けて記載されている。これは、すぐ下にある「日課・出来事」欄での個人名と社会的カテゴリーを結びつける役割をしている。たとえば、「買い出し (X)」と書いてあれば、X という人が「買い出し」をしたのではなく、X という「メンバー」カテゴリーを持つ人が「買い出し」に行ったのだと。そして、その「日課・出来事」の左にある「時間」欄は、時系列で作業所の日課・出来事を組織化することになる。このことにより、その日にいつ誰が何をしたが一目瞭然になっているだけでなく、時間という軸を通して来所者の行動を組織することになっている。むしろ、この記録は未来に向けてその日の出来事を提示している (論理的に・實際上、過去ではない) ことにより、将来読むことを想定して書かれているのである。次の「個別・特記事項」欄は、メンバー別に「終わりの会」での発言を記入してある。ここでは、メンバー別にその日の活動が組織されている。「メンバー」が「何を」したか、という社会的カテゴリーと活動を、その日に固定している。このように時系列、個人別に作業所の活動を組織することによって一つの記録はつくられ読まれることになる。

以上見てきたように、記録は社会的カテゴリーと活動を伴った一つあるいは複数の記述によって構成されている社会的構築物 (social artifact) である。本研究では、この (一つあるいは複数の記述により構成される) 記録が、それ自体として成立しているだけでなく広く社会的状況に位置づけられていることを念頭に置きながら、いかなる相互行為によって / おいて生み出されるかということ

扱っていきたい。

1-2. 高次脳機能障害作業所の記録～「本日の活動」から

次に「高次脳機能障害作業所」の記録という側面を、「日課・出来事」の記録をもとに考えていきたい。この記録は単にある場所で記録が行われているということを示すだけではない。この記録が「高次脳機能障害」を対象とする「作業所」での共有を前提として書かれているものであり、その意味で制度的な記述の集積ということができる。

この「日課・出来事」は、「終わりの会」の「本日の活動」で指導員によって記入される。このことは、この記録がメンバーによる本日の活動という事実を記入しているだけでなく、メンバーが本日の活動を記憶して語ることができるかを確認する場面でも使われていることを示している。

「本日の活動」の場面では、指導員が「コロポックル日報」に記録しながら全員に向かって「今日はなにをやりましたか？」というような今日の活動についての発言を求める。指導員は「何をやったか」という事実を記録したいからだけでこのような発言をするわけではない。これは高次脳機能障害の主たる障害である記憶や失認に関連している。この記録はその活動に関連するメンバーがその活動を行ったことを認識できているかどうかということを確認する道具となっている。つまりこの記録は、1-1で述べてきたような「時間」と「活動」と「名前」を記録するとともに、「終わりの会」中での相互行為を組織化する道具 (artifact) となっているのだ。この記録は例えばXという「メンバー」カテゴリーを持つ人が「買い出し」に行ったのだというだけでなく、Xというメンバーが買い出しに行ったことを覚えてミーティングで語ることができるかということと関連しているといえよう。

ここでメンバーは記録をするということを目指しながら想起し発言することになる。指導員の「コロポックル日報」と手に持ちながら行われる「何をやりましたか？」という発言は、記録を指向する発言として行われ、メンバーは記録を指向して共同で想起し、もしくは個人の独力で想起し発言することになる(第一回報告書、松島論文参照)。「日課・出来事」は「活動」と「名前」を記入することになっているため、基本的に活動をした本人がその活動をしたことを表明し説明することになる。例えば指導員はまず特定の人を指名しないで「何をやりましたか？」というような発言をして、メンバーの誰かが答えると指導員は一つずつ「誰が何を」したか確認しながら記入する。そして記入し終わったら時系列的にまだ出ていない活動を行った人に視線を合わせる。それでも言葉が出てこなければヒントを出して例えば「製本やんなかった？」と言う。その「製本」がヒントになってメンバーは「ホッチキス留め」という新しい情報を提出する。そこで指導員は製本に加えてホッチキス留めという記録をするという行為を提示する。ここで記入するという行為が一つのトピックの終了を提示して次のトピックに移行する。すなわち例えばこの「本日の活動」というミーティングの場面は、「時間」「活動」「名前」の記入項目のある「日報」を記録することを指向して組織化されていることがわかる。

ここで概略したことは記録することで何をしているか？という課題に関することである。記録するというのはこれまで見たように事実をありのままに記録するというだけではない。記録することは事実を映し出す鏡ではなく、むしろその記録する場面/状況に関連して行われる活動でありその場面での記録実践であることがわかった。また同時にこのことは、想起するという行為に関しても想起するという単独の行為があるわけではなく、この場合、

記録する場面への指向性が組織化されているからこそ現れてくるものだという示しているだろう。ここでは記録と想起には深く立ち入らず、次にこの記録する場面がいかにか成し遂げられているか会話分析によって考察したい。

2. 「今日の一言」の記録実践

さて、ここでは「終わりの会」の「今日の一言」の場面のビデオデータ(断片1)を参照しながら、これまで述べてきた記録する実践に関して考察したい。まずトランスクリプトによってQMさんの順番でどのような会話があったか見てみよう。

この相互行為で何が起きているかシーケンス(時系列の繋がり)にそって分析していこう。

まず、01行「それじゃあ、QMさんお願いします」で、HD指導員は適切に次の話し手を指名し、終わりの会の司会であることを示す。この「それじゃあ」は、前の人が終わって次のQMさんに順番が移動したことを示す。

つまりここは順番に一人ずつ語る場面となっている。これに対して、QMさんは「はい」と言うことで、HD指導員の指名により、自分が次の話し手であること(つまり、話す義務と権利を持つこと)を示す。同時にこれは、HD指導員が司会者として次の話し手を指名することの権利と義務があることを承認したことになる。

この場面は、次のようなカテゴリーと活動の組み合わせを持って見ることができる。

HDさん	-	QMさん	-	その他のメンバー
指導員		メンバー		メンバー
司会者		発言者		聴衆
話し手/聞き手		話し手/聞き手		聞き手

02行ではQMさんが「はい 今日」話し始める。これに対し03行、05行のHD指導員の「はい」は、現在の話し手に対する、正当な(適切な)受け手であることを示している。終わりの会という複数の人の集まりでは、誰もが「あいづち」をうつ権利を持っているわけではない。その権利は参加者全員に等しく配分されているわけではなく、非対称的に

トランスクリプト(断片1)

HD:指導員、QM:メンバー、XU:メンバー

(.) :沈黙、* :活動、[] :同時発話、hehe:笑、() は不明語、(()) :説明

01 HD : それじゃあ、QMさん、お願いします

02 QM : はい 今日 は よていひょ(.) 予定表には 石絵を[作ることに]なってたんで

03 HD : はい はい [ehehehe] はい
* 予定表を見る

04 QM : で ええ 今日 は (.) 今日 は 会報作[った]ので

05 HD : はい [はい] はい

06 QM : 今度は 石絵を作ってみたい(と思います)

07 HD : はい あっなるほど [わかりました]

08 全員 : ahaha[hahshahahaha]

09 HD : () だったの[けど((記入しながら内容を話す))]

10 XU : [QMさん、練り仕事一所懸命やってもらわないと=

11 HD : =うーん、けっこうさいんです[よ] 重いですよ(.) えっと((記入しながら内容を話す))

12 XU : [ha]ha

配分されている。この場合、司会者が話し手の会話をあいづちで受け、継続させることによって終わりの会が進行することになる。ミーティングがスムーズに進んでいくのはこのためでもある。

さらに言えば、ここではほぼ文節ごとにあいづちを打っていることが見てとれる。これは、指導員とメンバーの二人の間で発言を確認することを指向しながら進めていることを表しているだろう。この確認という行為が、記録するという行為と関連していることは言うまでもない。

03行のHD指導員の笑いも、正当な(適切な)発言の受け手としてなされている。これは、[石鹸を作るはずだった]と言ったことに対して「作らなかつた」という事実の差を予期する笑いである。これは、次の04行、05行で、QMさんが「会報を作る」と言ったのと同時に「はい」と重なりあっていることで、「石鹸を作るはずだったが会報を作ったという」事実の落差の予期が合っていたことを確認していると見ることができる。これに対して、会話の第一の聞き手であるHD指導員が「あつなるほど」と言うことで、話の内容の確認が行われ、メンバー全体が遅れて笑いが起こる。これは、QMさんとHD指導員で次第に「オチ」にもちこむ過程といえよう。

引き続きHD指導員が「わかりました」とQMさんの発言を確認し、一つのトピックが終了されたことを表明する。HD指導員はQMさんの発言内容を言いながら「日報」の記録を書く作業を行う(09行)。XUさんは、HD指導員の記録作業を聞きながら、「QMさん、練り仕事・・・」とQMさんの発言にコメントする。続いて、HD指導員がXUさんの発言にコメントしながら記録への記入を行う。これらを通じてQMさんの発言は終了し雑談に移っていくことになる。

この「今日の一言」の場面は、発言 - 記入 - 発言 - 記入...という連鎖を基本にしてミーティ

ングが構造化していることがわかる。その連鎖の中で、指導員は指名し(時にメンバーが自己指名し)、メンバーが自分の名をもとに発言し、指導員が記録をする。指導員によれば言葉のでない人がいた場合は指名して文章を共同で作ることもあるという。いずれにせよ、「今日の一言」の場合は、「本日の活動」と異なってあくまで発言は個人に帰属する。

ここでHD指導員によって「個別・特記事項」に記入された文面は次の通りであった。「今日は予定表では石けんづくりだったが、会報づくりだったので次回はぜひ石けんづくりをやってみたいと思います。」指導員によればこの「個別・特記事項」には、その人の発言「そのまま書く」ことにしているとのことだった。例えば、「こだわる発言」をした場合でも「そのまま書く」ことにより後で参考になるとのことだ。この「そのまま書く」ことは、将来における記録の利用法(発言の参照)と関連している(QMさんの「やってみたい」という発言も後の「記録および打ち合わせ」での場面で議論されることになる)。それと同時に、終わりの会で発言を記入するという実践とも結びついているのだ。この記録利用上の機能と記入の実践とは結びついていることがわかる。

「今日の一言」の場面は、このように指導員とメンバーが記録を指向することによって秩序を持って進行していることがわかる。指導員は記録するために確認の発話を行い(例えば「はい」)、メンバーは記録を指向しながら発言をまとめようとする。これにはミーティングの参加者が相互に状況を認識し、記録を指向した場面場面にあった活動(沈黙も含む)をしているためだと考えられる。さらに言えば、高次脳機能障害者である当事者メンバーが、一日の出来事をただ思いつくまま語るだけでなく、また「本日の活動」と違った仕方、記録への指向があることにより、場面で発言することによって自分の考えを記録でき

るようにまとめて記録可能な形で話すという練習 (プラクティス) にもなっている。

3. 「記録および打ち合わせ」の記録実践

最後に「記録および打ち合わせ」の場面を検討する(注2)。この場面は「終わりの会」が終了し、メンバーが帰宅し作業所の一日の業務が一段落した後、指導員が「個人ファイル」を記入するインフォーマルな会話場面である。その場に役員もいる場合もあればない場合もある。

先に述べたとおり「個人ファイル」は個人別に日々の「特記事項」を記録する記録用紙を綴じたファイルである。その用紙には「氏名」「日付」「特記事項」「記入者氏名」の欄があり、一日に一人の指導員が記入する(資料3)。どの指導員が誰を書くかということ

資料3 (QMさん個人ファイル)

について、必ずしも固定されているわけではないが、「なんとなくこの人のことは、この

人が書くことになっている人もいる」ということだ。この「個人ファイル」はメンバーの現状や作業所での対処に関するファイルであり、指導員と役員が利用するための記録である。

さて、ここでは「記録および打ち合わせ」でQMさんが話題となった4つの場面を取り上げ、時系列を追ってQMさんの「記録および打ち合わせ」場面を検討していくことにする。この場面はインフォーマルであるため、誰かが司会をして議事進行するわけではなく(注2の開始場面参照)、記録をしながら雑多な情報を交換する場になっている。そのため同じ人の話題が出たり消えたりするなかで指導員は記入作業を行っている。どれも3分から8分と短い会話の断片である。

< 記録および打ち合わせ >

	時間	内容概略
断片 2	16:41-16:45	基本情報の交換
断片 3	16:56-17:04	QMさんの現状
断片 4	17:13-17:15	終わりの会での発言
断片 5	17:41-17:44	職場、病院、家族の関係

断片2では記入者の選択が行われ、QMさんについての基本情報の交換がなされている(注3)。MB指導員の「誰書くかな」という発言に応じて、HD指導員が「QMさん」と個人ファイルを選択する。

それに引き続いてMB指導員は「QMさんについてですけど。ああいう人じゃないかと思うんですけど」とQMさんをトピックをあげる。これに対して、HD指導員は「うんでもねえ家族と一緒にということがみそだと思うんだよねいろんな意味で」と家族というカテゴリ集合を提示する。これでQMさんを個人の特性から見ていくか、家族との関係で見ていくかという二つの軸が提案されたことになる。その後、ここでは職場が「診断書」

を必要としていること、ボランティアの役割などについて議論が展開する。これらによって、QMさん個人の障害に関すること、家族・職場との関係、作業所での処遇についてというテーマが一揃いすることになる。つまり、QMさん個人の障害がどの程度なのか、そしてそれぞれの集団の中でのQMさんの位置づけはどのようなものにすべきかなどという課題がここで提起された。これらはHD指導員が「個別ファイル」を取り出し、自分の前に置き、ペンを持って話を聞くという一連の活動の最中に行われ、記録を書いているということに指向したカテゴリ設定であり相互行為の進行だったといえるだろう。

断片3では、HD指導員から家族との関係がどのようなものかMB指導員、ON指導員に聞いている。これは記録を書くために自分の知らない情報をうめていく過程となっている。ON指導員からは家族が職場との対応で困難をきたしている話が出てくる。ここで「個人ファイル」には「職場全体の彼に対する処遇が統一されていない印象を受ける」と記入されている。

トランスクリプト(断片3)

MB: あ:のねえ(.)QMさんと3回ほど顔を合わせてちらっと見えてきたことは、やっぱりねえ:、なんかねえ:、あの(.)なんかXEさんとかぶってんだけど、なんか、うん、よくわかっていないって感じ ha[hah]

ON: [本人]はわかっていないと思うよ(.)うん、本人はなんでここにいるのか、よくわかってないけど[だけ(どとりあえず)]

MB: [そ、それ]以前のことで、作業とかいうのもよくわかってないみたい=

ON: =何? どういうこと?

MB: あ、こう何て言うの遂行とかさ、頼まれたとか、指示されたことはできるんだけど、それを今する:のはどうしたらいいのか(わかってない)みんなはそばでやってもQMさんはポケーっとしてるんだよね。周りから言う、たとえば家族にコソッと言われてやると動き出すって感じなんだよね=

ON: =あっそうだろうね

(省略)

ON: あ:(.)本人(.)あのね、毎日ね(.)作業所に行っても言いよって職場から言われてるらしいんだよね

HD: まじかい=

MB: =やっぱ、そうとうこれは(.)問題(.)じゃないの(.)慣れるとか慣れないとか言う前に最初職場と調整せんと危ないんじゃない=

ON: =そう

(記号説明: (.) 沈黙、: 長音、= 間無し接続、[(上下) 同時発話

さらに、ここでは職場・家族だけでなくQMさんの障害自体についても焦点化される。

ここでHD指導員は個人ファイルを前に置いてペンを持っているだけで会話には参加していないが、ON指導員やMB指導員は発話の終了時にHDを見ていることからHD指導員が情報を統合しつつ記録を行うことを指向してこれらの発話がなされていることがわかる。ただし、ここでQMさんの障害自体について発言された内容は「個人ファイル」に記入されることはなかった。

次に職場との調整や、職場への働きかけについて話題が展開していき、職場も熱心だから望みはあるので職場と顔の見える関係になりたいという話が出る。また、「3週間目だから、そろそろ本腰入れてかないと(MB指導員)」という時間軸が導入される。

断片4では家族と関係と職場について話題が出る。一方で、QMさんが石けんつくりについて「やる気満々」だったことが指導員(HD、MB、ON)と役員の共通認識として語られる。

トランスクリプト(断片4の一部)

HD : QMさん, 石けん作る気, 満々で来た=
た=

MB : =ね, ね, なぜかやる気満々だった ha
た ha って ha いうのは[ちょっと驚いた]

ON : [そうなん]だあ

HD : あれも不思議だったなあ

役員 : QMさん? へ:え

これらは、終わりの会での発言「今度は石けんをつくってみたい (と思います)」という発言についてのコメントである。これはメンバーと作業所が「作業」によって直接結びつく可能性を示唆しているだろう。

この20数分後の断片5では、職場が求める診断書についての話題が展開している。病院でのリハビリテーションは終了しているが、来所が始まった作業所では診断書は出せない。そこで病院と作業所、職場と作業所との関係もつくっていく時期に来ていることが確認される。

「記録および打ち合わせ」では、以上のように記録をするということに指向しながら複数の人の情報を統合する作業が行われている。そこでは、カテゴリーとカテゴリーの関係が変化していることが見てとれる。断片1でQMさんの所属するカテゴリー集合(集団)が家族、職場、作業所であることが提起され、断片2では家族との関係が焦点化される。

そして、断片3では<職場 - (家族=本人) - 作業所>という、作業所にとって職場は遠い存在であることが確認され、<本人 - 作業所> <職場 - 作業所> <家族 - ボランティア>というように関係を再編していくことが提案される。これは職場と本人に作業所が直接つながっていくという方向性を示している。

断片5では、<職場 - 家族 - 作業所>という関係が再確認され、現状では、家族が職場との関係を一手に引き受けていることが共通

の課題として浮かび上がる。そこで、診断書の発行を機に<職場 - (家族/作業所) - 病院>という関係に持ち込み、作業所が、家族と病院をつなげ、職場と病院も作業所を経由して家族の負担を軽減することが提案される。ここの内容は、「個人ファイル」にON指導員からの話を書いた後で、「」診断書」の事など電話などで再度確認し職場にも問い合わせる必要があると思える」と記入されている。

これまでみてきたことからわかることは、「記録および打ち合わせ」場面では、書く内容(対象)を指向しながら会話が進行するため、雑多ではあるが有益な相互行為がなされ、情報収集と情報編集がなされていることである。これは指導員による「個人ファイル」と「記録および打ち合わせ」の位置づけにも表れている。「日報」には発言そのままの事実をかくのに対して「個人ファイル」は、「印象的なこと、もの」を書いているとHD指導員は話している。これは記録を書きながら「印象が正しいかどうか確認する」作業を行って、一人で聞いたことも記入するが、それにどういう感覚を持ったかも記入するということである。断片5のところで「...問い合わせる必要があると思える」と記入してあるのは、このことだ。

作業所コロポックルでは、フォーマルな会議として週一回の「ケース会議」という個人毎の方針を定める会議を持っている。これに対して「記録および打ち合わせ」はインフォーマルな形でこの「ケース会議」を支えているといえよう。そのメンバーが現在どのような集団(家族、職場など)との関係を持っていて、個人としてどのような状態にあるかという、そのメンバーの語りの秩序(「物語」)をつくる役割を持っているといえよう。これは、本人や家族でさえ見えにくい高次脳機能障害という障害を見えるようにしていく装置の一つだろう。

4. さいごに

本研究は高次脳機能障害作業所における記録実践をエスノメソドロジック的会話分析の立場から考察した。そのなかで指導員とメンバーが参加する「終わりの会」と、指導員と役員だけが参加する「記録および打ち合わせ」の場面を中心に、書いた内容だけでなく、書いている時にいかなる実践がなされているかということに注目して考察してきた。

「終わりの会」の場面では、指導員とメンバーが記録を指向しながら相互行為を組織化していることが明らかになった。メンバーが発言して指導員が記録するという会話の構成だけでなく、メンバーが発言し指導員が「はい」などと言って記録を指向した確認の発言をすることにより、「終わりの会」をミーティングとしての秩序ある組織化をしていることがわかった。このことはメンバーの継続的な発言をスムーズにしているとも考えられないだろうか。また、これによりミーティングの参加者は記録を指向した場面場面にあった活動が可能となっていると考えられる。

その日の作業が終わってメンバーが帰宅した後に行われる指導員と役員による「記録および打ち合わせ」では、書く内容(対象)を指向しながら会話が進行するため、雑多ではあるが有益な相互行為により情報収集と情報編集がなされ、フォーマルな会議である「ケース会議」を支えているといえる。この研究により、記録するということは何かをありのままに写しとる作業ではなく、記録をとっていることを指向するという点において、ある場面における実践と強く結びついていることが再確認された。この作業所において、この記録と実践の結びつき方が、ミーティングの場面での当事者メンバーの発言を導き、指導員同士の情報交換を促進させているのだろう。すなわち、この研究では、記録を記録する実践の場に返すことにより、記録への指向や記

録による場面の秩序の組織化によって高次脳機能障害の作業所という相互支援コミュニティが生み出されていることを示したといえよう。

[注]

*本研究は北星学園大学特別研究費助成研究の一部である。

また、本研究は、相互支援コミュニティ発達プロジェクト編『高次脳機能障害プロジェクト第1回報告書-小規模作業所「コロポックル」における研究の軌跡-』所収の同タイトルの論文に加筆・修正を加えたものである。

(1) 本論文に収めた資料は次の通りである。

資料1:「コロポックル日報」当該日
1 ページ目

資料2:「コロポックル日報」当該日
2 ページ目

資料3:「個人ファイル」QM氏分当該日

(2) 「個人ファイル」記入は、たとえば次のように開始される。

トランスクリプト(断片2) 16:41-16:45

参加者は全て指導員

MB: 誰書くかなあ(.)KN君はまあもう決まってるでしょ=

ON: =あ:

MB: () してる人でしょ

ON: (わかり) 電話しなきゃキャンセルの電話=

HD: =あ:

MB: () ちゃん HJさん誰書きます

HD: あたし(.)誰書こうかな(.)

MB: STさんとZWさん書こうかな(.)

HD: QMさん

MB: うっ() ことだ

*ファイルを数冊抜き出して置く

HD: QMファイルがない(.)

MB: QMさんQMさん

MD: (.)Hさん

MB : はい

MB : QMさんについてですけど、ああいう人じゃないかと思うんですよね

HD : うんでもねえ家族と一緒にということがみそだと思うんだよねいろんな意味で

(3) 匿名性を高めるため、一部の設定を変更した。

[参考文献]

水川喜文 1993 「自然言語におけるトピック
転換と笑い」『ソシオロギス』17:79-91, 東
京大学大学院ソシオロギス編集委員会

水川喜文 1997 「ビデオゲームのある風景 -
インタラクションの中のデザイン -」『語
る身体・見る身体 <付論> ビデオデータ
の分析法』, 山崎・西阪編, ハーベスト社

永井肇監修, 阿部順子編 1999 『脳外傷者の
社会生活を支援するリハビリテーション』,
中央法規

日本脳外傷友の会編 2001 『Q & A 脳外傷』,
明石書店

相互支援コミュニティ発達プロジェクト編
2003 『高次脳機能障害プロジェクト第1回
報告書 - 小規模作業所「コロボックル」に
おける研究の軌跡 - 』, 相互支援コミュニ
ティ発達プロジェクト

Suchman, A. L. 1987 *Plans and Situated Action*,
Cambridge University Press
=1999 『プランと状況的行為』 L. サッ
チマン著 佐伯監訳, 佐伯, 上野, 水川,
鈴木訳, 産業図書

[Abstract]

Making the Invisible Visible: Social Workers' Cooperative Reasoning in Writing Documents for Persons with Traumatic Brain Injury (TBI)

Yoshifumi MIZUKAWA

This paper explicates how social workers use reasoning cooperatively in writing documents for a new member of a workplace with traumatic brain injury (TBI), for making the "invisible" disability "visible". Major causes of TBI are motor vehicle injuries, sports injuries, falls and others; however, TBI may cause not only visible physical difficulties, but also some invisible difficulties including intellectual, emotional and social ones (e.g. memory). Therefore, unlike other visible disabilities, TBI may not be seen directly from the outside features of a person, but may be acknowledged through social interaction with the person. When a new member of a TBI workplace comes, social workers should observe how the person interacts in the daily work, and write it down on documents through recurrent talks with other social workers using commonsense knowledge, categories and reasoning. The videotaped data shows a closing meeting, in which persons with TBI and social workers talk about the day's work, and the gathering of the social workers for writing documents about the day's activities after the closing meeting. Using ethnomethodology and conversation analysis, this study focuses on how a social worker assembles local orders (e.g. vision, reasoning, practice and others) and produces an ordered document.

Key words: Traumatic Brain Injury (TBI), Writing Praxis, Social Interaction, Category, Conversation Analysis

